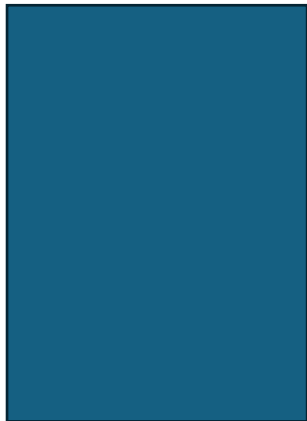


こんなものを読んできた(39)

「古事記」(1) 稗田阿礼、太安万侶

校長・鈴木 健

もうすぐ「建国記念の日」です。この休日の由来となった日本の建国神話は、日本最古の書物である「古事記」に記されています。この「古事記」は当然ながら文語(古文)で書かれていますが、意外とわかりやすくこだわらずに読んでみると物語として楽しめます。古事記の中で私が特に好きなのは、「神武東征」と「ヤマトタケル」の二つの物語です。



「神武東征」は、初代天皇の神武天皇(イラスト)が九州の日向を出発し各地を経た後、近畿地方に攻め込んでヤマトの国を建てる話です。この話については昔から歴史的というより政治的な論争の対象となっていて、なかなか意見が言いづらいのですが、私は何らかの歴史的な事実を反映したお話ではないかと考えています。

その理由を説明しようとする、「邪馬台国は九州か、それとも畿内(近畿地方)か」という「邪馬台国論争」にまでさかのぼらなくてはなりません。この問題では私は九州説支持派です。

この論争は最終的には、中国の歴史書「魏志東夷伝倭人条」(魏志倭人伝)をどう読むか、という問題です。魏志倭人伝には朝鮮半島から邪馬台国へのルートが書いてありますが、出てくる地名のほとんどは、九州北部に当てはめることができます。それなのに邪馬台国だけが飛び離れた近畿地方にあったとするのは不自然です。

そう考えれば、神武東征の物語は、九州にあった邪馬台国(またはその流れをくんだ)勢力が、近畿地方に攻め込み、大和朝廷を立てた歴史的経緯を反映したものとして納得できます。

次に古事記の神武東征の話は合理的でリアルであることです。神武天皇の軍は南九州を出た後、北九州や瀬戸内海沿岸の各地に数年ずつ滞在して根拠地を固めながら進み、大阪湾からの上陸・正面突破に失敗した後は、紀州(和歌山)方面から迂回して背後から攻め込む作戦に切り替えます。現代ならともかく、古代にここまでのストーリーを捏造したでしょうか。

また最大の理由は、大和朝廷が最初から近畿地方にあったのなら、九州から来たという話を作る必要がない、ということです。天皇家の先祖は最初から大和の香久山や三輪山、畝傍山などに降りてきたという話にした方がすっきりします。

古事記の神武東征の物語には現代の視点からは「あれっ」と思うところが少なくありません。自分たちの方から攻め込んだのに、元から住んでいた人々を国栖(クズ)だの土雲(ツチグモ)だのと呼び、その首長たちをだまし討ちで皆殺しにするなど、人権感覚ゼロの野蛮さです。その一方で、大阪湾の上陸作戦で負傷し、無念の雄たけびを上げながら亡くなる神武天皇の兄イツセノミコトなど、古代人の荒々しい輝きを放つ生命力が感じられ、そこがとても魅力的です。こういった物語は、現代のつまらないイデオロギー論争の対象にするのではなく、雄渾な古代の英雄譚として、素直に楽しむべきものだと思います。